

序 文

昭和63年の本学の研究活動一覧第12輯がこゝに刊行されることになりました。

昭和50年10月本学が開学され、昭和51年、52年の第1輯が発刊されてから今回は第12輯、私にとっては感慨無量のものがあります。ともうしますのは、いろんな意味で私もこの業績一覧を発行することの提案者の1人であったからであります。

そして今、その第1輯の序文における当時の平松学長の言葉の中に「研究室は53年度から使用可能の状態、着任された先生方が不自由な研究生活を余儀なくされ、洵にお気の毒、云云」と云う意味のことが述べられており、実際、51、52年の1輯分は32頁であります。ところが、第11輯はなんと137頁に及んでいます。論文題目の数が当時の5倍以上にもなったと云うことで、本学の教育研究活動がいやが上にも昂揚しつつあることの何よりの証拠であります。特に、業績項目の中には他大学に見られぬような医学・薬学は云うまでもなく、和漢薬研究所、一般教育担当教官も溶け込んだ総合的研究が随所にみられることは特筆に値するものと存じます。

私は化学屋の1人ではありますが、世界中の化学・生化学論文を網羅したアメリカ化学会発行のケミカルアブストラクトの論文誌中で最多論文を提供しているベスト6のうち5大学が日本の大学、ベスト22のうち8大学が日本の大学であります。こんなことを思うと、化学に限らず他の自然科学の分野でも日本の大学は決して劣っているとは思いません。従来日本人は独創性に欠けていると云われてきましたが私はそんな卑屈な態度であってはならないと思うのです。事実、例えば、1901年、ジフテリア免疫で第1回ノーベル医学生理学賞を受けたベーリングよりも7、8年も前、なんと明治27、8年頃、ベーリングと共にローベルト・コッホの弟子だった北里柴三郎博士が破傷風菌の純培養の研究を完成しており、ベーリングの研究は北里の研究を真似たものであり、ノーベル賞は北里が受けるべきものと評されていることを思うとき日本人の自信と誇りを感じるのであります。

本学に於ける先生方の研究も多くの世界の研究者と鑄をけずりあい、何時の日かそれから抜け出すような成果の得られることを期待するものであります。

学 長 山 崎 高 應